

れは鎌倉が武家の古都であるという大きな特長の一つだ。文治二年(1186)から建久二年(1191)まで6年間、京都において、六条八幡宮の造営、閑院内裏の修造、院御所六条殿の再建、大内の修造、院御所法住寺造営を行っている。これは御家人役でやっている。このような造営を通して、おそらく京都の木工寮の大工、調度や工芸に秀でた京都の工匠をつかんだ。そして建久二年に鶴岡八幡宮の再建、幕府の再建をし、建久三年から永福寺の造営をやっている。このときは本格的な建築ができるというのが大前提。10年もするというような工人が鎌倉に集まってきて、非常に賑わいがあつた。

北条執権時代の建築・・・建長寺・円覚寺

建長寺は宋朝風の本格的な禅刹として鎌倉で最初に創建された寺院。建長五年(1253)に中心伽藍ができていた。創建する以前の土地は地獄谷として、罪人の処刑をするところだった。そこを寺院に転用する。現在の発想とは全然違う。

まず惣門に入って突き当たりにあるのが山門、山門の両脇から二階建ての回廊が出てきて、仏殿に向かう。主軸線上に、二階建ての建築がずっと並ぶ。仏殿の両脇に土地堂、祖師堂という、禅独特の、土地の神様と禅宗の祖師を祭ったお堂がある。その背後の東側の庫院と相對して、西側に大徹堂、僧堂がある。中庭があつて、ジャクシンが植わる。周りに裳階があり、華頭窓や花灯杵がついた回廊がぐるりと南北西にまわっていて、光が回廊の両側から入ってくる。これは禅宗独特のものだ。もともとこのアーチ型の形というのは、西アジアで発達し石造でつくられた。それが中国に入ると木造におきかえられ、それが日本に入ってきた。

仏殿の後ろに、二階千仏閣という法堂がある。禅宗の寺院ではこの法堂と僧堂が一番重要だといわれる。その西側に梅檀林という、これは衆堂とも呼ばれていて、どういう風に使うかということ、大徹堂で座禅を組んで、修行に励む。食事や就寝も全部この大徹堂でやる。疲れると衆堂に行つて、經典や図録があり読書や喫茶ができる。清拙正澄が日本にやってきて、宋にはある衆堂とか年寄りの修行する施設がないというので、それを建長寺に作った。当時としては非常に文化的な施設が、禅院のなかにできた。

二階千仏閣の北側に札間と玄関があつて、その北側に得月楼という方丈がある。一山一寧という高僧が中国からやってきて建長寺の住持となったときに、この建物が建てられて、ここを書斎にした。一山にそばに仕える侍者といわれる僧が付けられるが、試験をして選ぶ。詩文を書かす。それで二人を採用した。その二人の中の一人が夢窓疎石^{めいしき}だった。試験は方丈で行った。一山一寧は、その詩を方丈の明窓で読んだ。従来の日本建築史だと、このような付書院は和様であったといわれている、「寝殿造りにある^{だしふつくえ}『出文机』が禅院に影響を与えた。中世初期の書院づくり

の飾りのひとつになった」とか言っているが、実はそうではなく、この時期に中国から禅院に入ったきたものだ。和様風の部分と、非常に宋風の部分が一体になっている。

塔頭という小さな寺院が伽藍周辺の岡にたくさんつくられた。これは鎌倉のお寺の特長で京都には見られない。それが現在にも生きているし、中世の遺構もたくさん残っている。保存状態も良い。夢窓疎石が塔頭にしていた塔頭が現在も残っている。現在の中心伽藍と同じ塔頭が中世から続いている。建長寺では中世にさかのぼる建物はなく、中世の伽藍の様子が分かる資料と、近世はじめの塔頭をふくめた全体の様子がわかるような史料、そういうものが非常によく保存されていて、貴重な遺産である。

円覚寺は弘安五年(1282)の開堂だが、正応二年(1289)に火災にあい、永仁四年(1296)に再建供養が行われている。貞時の十三回忌のときに法堂が供養されて重要伽藍が揃う。庫裡と方丈が二階建てで、鎌倉では方丈が二階建は珍しい。円覚寺の場合は鎌倉時代に創立された塔頭が三所ある。白雲庵が早く塔頭としてつくられた。二階建て客殿で、まわりに濡れ縁がある。非常に独特で、それが鎌倉の寺院の特長だ。丘陵を利用して谷戸の中に寺院をつくり、塔頭等を高台に建てている。

円覚寺に伝わった仏殿の古図がある。永禄年間(1558～1569)に火災にあつて中心伽藍西側の塔頭が全部焼けた。再建にあつたときの仏殿の計画図で、以前の鎌倉の五山を考えたときの貴重な史料(国重要文化財)だ。再建は費用が非常に大変だということで、近くにあった太平寺というお寺の仏殿を移築した。規模は小さいが、およそ三間、裳階づくりの非常に洗練されたもの。年代は大体15世紀初めころで、古い時期の禅宗の様式がわかる。

武家政権と禅宗の結びつきが生んだ普遍性とは

このように、建長寺・円覚寺が北条氏によって創建されるが、最初にいったように、武家と禅宗の関係は、その後の文化、政治を考えるうえで非常に重要だ。鎌倉では鎌倉の公方が建長寺や円覚寺の高僧にいろいろなことを質問して教えを乞う。当時の禅僧は經典だけでなく、文化そのものである。いろいろな質問にあうが、即座に答える。日本の歴史もよく知っている。聖徳太子のことを聞かれてもきちんと答える。そういう意味で、武家の棟梁である將軍と公方、それと禅僧との結びつきは非常に強い。つまり、武家文化に与えた禅僧の影響というのは非常に強いということだ。日本の文化はそういうふうに出て上がっている。その原因を鎌倉に初めて北条の執権が取り入れたのだが、日本の歴史の上では、ただ1回だけ経験する歴史である。それが後の武家政権に備わっている普遍的な形をつくつたのである。